鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

新番所後遺跡

県立指宿養護学校新設に伴う発掘調査報告書

1977・2

鹿児島県教育委員会

序

鹿児島県教育委員会では、昭和49年度に実施された県立指宿養護学校建設に伴い、当該事業区内の新番所後遺跡について発掘調査を実施しました。

ここに、その調査結果を報告書として発行いたします。この報告書が、広く文化財愛護のため十分活用されることを念じています。

なお、発掘調査に当たって、指宿市教育委員会並びに地元関係者の御協力をいただいたことに対し、厚くお礼申し上げます。

昭和52年2月28日

鹿児島県教育委員会

教育長　国分正明

例　　言

1　本書は県立指宿養護学校の新設に伴う埋蔵文化財の試掘ならびに発掘調査報告である。

2　発掘調査責任者　文化課長　犀川碇吉　（現県立鹿児島工業高等学校長）

発掘調査者　文化課専門員　河野治雄

文化課主事　長野真一

補助員　佐土原逸男

3　本書の執筆は、長野真一が行い、実測図等の作成は、戸崎勝洋、中島哲郎が補助した。

4　本書に用いたレベルの数値は、海抜絶対高である。

5　本書では、土器、石器は通し番号とし、実測図と図版の番号は一致する。

目　　次

第１章　調査の経過……1
第２章　遺跡の立地と環境……2
第３章　Ａトレンチの調査……5
　１．層　順……5
　２．出土遺物……5
第４章　Ｂ・Ｃトレンチの調査……8
　１．層　順……8
　２．層　順……8
　３．出土遺出……8
第５章　Ｄトレンチの調査……9
　１．層　順……9
　２．出土遺出……9
第６章　Ｅトレンチの調査……10
　１．層　順……10
　２．出土遺物……10
第７章　Ｈトレンチの調査……14
　１．層　順……14
　２．出土遺物……14
第８章　Ｉトレンチの調査……15
　１．層　順……15
　２．出土遺物……15
第９章　特別地点の調査……19
　１．層　順……19
　２．出土遺物……19
第10章　まとめ……24

挿 図 目 次

第１図　新番所後遺跡および遺跡分布図……3
第２図　遺跡周辺地形図……4
第３図　Ａトレンチ東壁実測図・出土遺物実測図……7
第４図　Ｂ・Ｃトレンチ北・南壁実測図・出土遺物実測図……8
第５図　Ｄトレンチ北壁実測図・出土遺物実測図……9
第６図　Ｅトレンチ西・中央壁実測図・Pit 群……12
第７図　Ｅトレンチ出土遺物実測図……13
第８図　Ｈトレンチ東・西壁実測図・出土遺物実測図……14
第９図　Ｉトレンチ東壁実測図・出土遺物実測図……16
第10図　Ｉトレンチ出土須恵器実測図……17
第11図　Ｉトレンチ出土遺構実測図……18
第12図　特別地点遺物出土状況と土層図……21
第13図　特別地点出土遺物実測図……22
第14図　特別地点出土遺物実測図……23

図 版 目 次

図版１　Ｄトレンチ調査風景・土層……25
図版２　Ｉトレンチ調査風景……26
図版３　Ｉトレンチ東側土層……27
図版４　ＩトレンチPit 群……28
図版５　Ｉトレンチ須恵器・土師器・紡垂車出土状況……29
図版６　特別地点遺物出土状況……30
図版７　特別地点遺物出土状況……31
図版８　Ａトレンチ出土土器・石器……32
図版９　Ｃ・Ｄ・Ｅトレンチ出土土器……33
図版10　Ｅトレンチ出土土器……34
図版11　Ｉトレンチ出土土器……35
図版12　特別地点出土土器……36
図版13　特別地点出土土器……37
図版14　特別地点出土土器……38

第１章　調査の経過

鹿児島県立指宿養護学校の新設を進めていた鹿児島県教育庁振興課（養護学校事務局）の要請に基づいて，同校敷地内における文化財の分布調査が文化課の河野治雄により，昭和49年６月６日に実施され，弥生式土器片の存在が確認された。その結果に基づいて，振興課とその対策を協議し，敷地の変更を行い，その変更された部分を中心に再度，昭和49年７月23・24日の両日，文化課と振興課との両者で分布調査を実施することとなった。その結果，弥生時代中期から弥生時代後期にかけての遺物が確認されるとともに，遺物包含層も推定された。

これらの調査をもとに文化課・振興課（養護学校事務局）との間で協議を行い，これらを受けて昭和49年10月11日より確認調査（二次確認調査）を実施することとなった。この試掘調査は，河野治雄・長野真一（文化課職員）の２名が当たり，作業員20名の協力を得た。その結果，柱穴を持つ遺構が確認されたので，さらに調査の継続を行い，昭和49年11月27日より事前調査（記録保存）と確認調査を昭和49年12月27日まで並行していった。さらにその後，遺跡の拡大が推測されることとなり，加えて12月より鹿児島県開発公社が工事に着工した部分に，遺物が発見された。そこで遺物の確認された地域と工事中発見部分について，昭和50年１月８日より，同年１月25日までの期間，事前調査として発掘調査を行い，記録保存を行った。

調査にあたっては，県振興課・指宿教育事務所・指宿市教育委員会・指宿市立丹波小・南指宿中学校国立病院分校の協力を得た。

また地層の分析では，鹿児島大学地質学教室，石川秀雄教授の御指導をいただいたことを記して謝意を表します。

第２章　遺跡の立地と環境

新番所後遺跡の所在する鹿児島県指宿市は薩摩半島の最南端に位置し，北は喜入町，西は頴娃町，南は山川町および池田湖をへて開聞町に接し，東は断層海岸線をもって錦江湾にのぞんでいる。

これら市町村が所在する南薩地域は各種型式の火山，温泉群の宝庫でもある。

すなわち現在の錦江湾は第四紀初期の火山であり，その火山活動によって膨大な火山岩の流出，火山噴出物を満たし，その後の開聞岳，池田湖火山，成川火山等多数の小火山の火山活動により丘陵性の火山岩地帯を形成した。このうち開聞岳は860年（貞歓２年），874年（貞観６年），1885年（仁和１年）等に噴火し，その様相も「開聞神山項・有火自焼，煙蒸満天，灰沙如雨，震動之聲，聞百餘里，近社百姓震恐失情……」（三代実録）とあるように，熾烈をきわめた噴火であったと思われる。

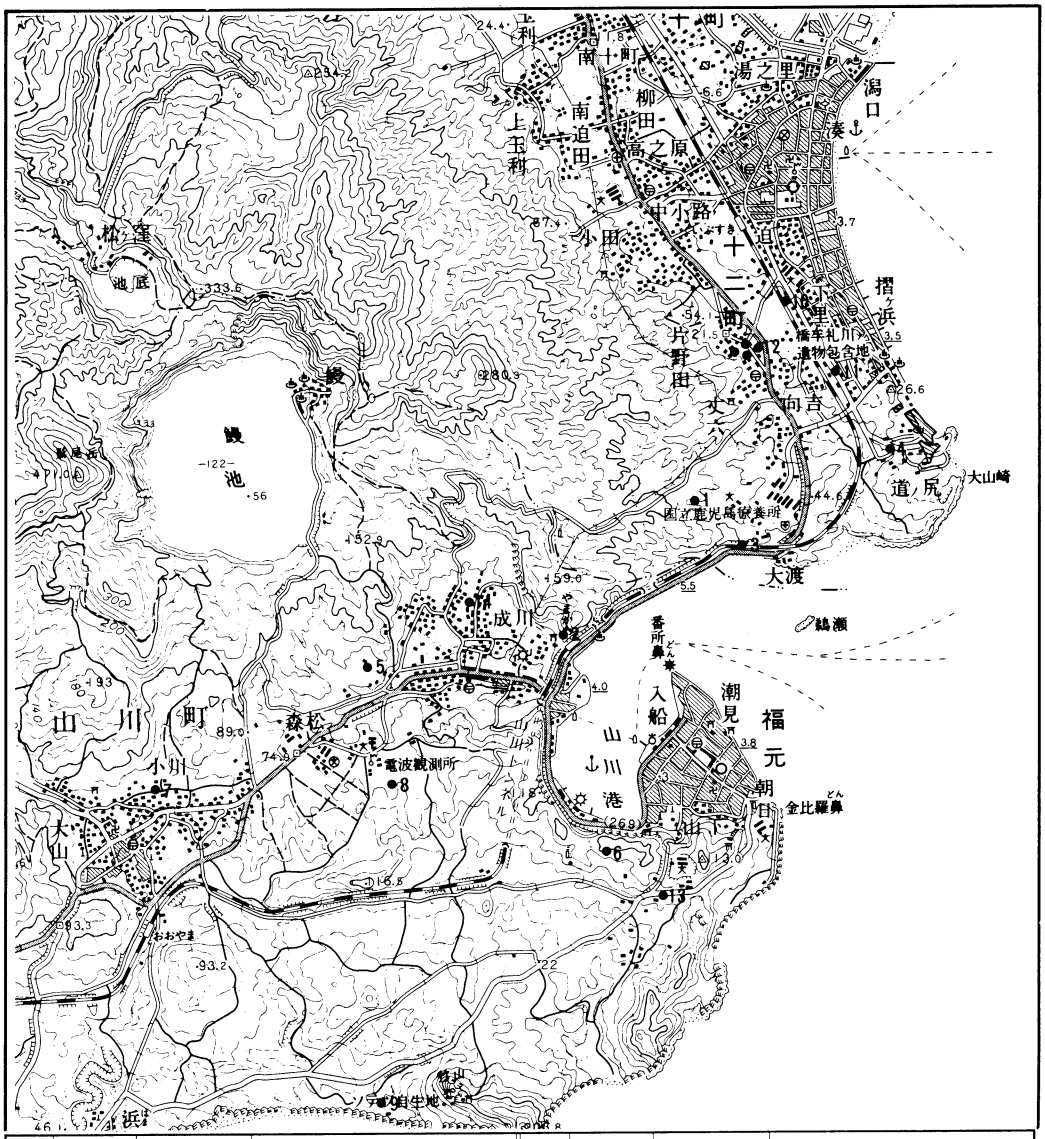
このような火山活動の為に地形は断層崖，火口湖（鰻池，鏡池，池田湖）などバラエティーに富む一方，シラス層（火山灰層）や，耕作の際，鍬が火花を発するというコラ層が所により２～３ｍにおよぶ堆積を示すといった火山地帯特有の地質も形成している。

指宿市もこの火山地帯に属し，古来より湯の豊かな宿として「湯豊宿」と称され，転じて「指宿」と呼ばれるようになったといわれる。

このうち遺跡は指宿市街地の西南約２．０㎞標高約60ｍの丘陵地に位置し，北面に傾斜するその傾斜地およびその各部分が遺跡地である。現在は丹波小学校がおかれているが，隣接して国立鹿児島療養所がある。附近の植生は，現在植林された松が主であるが，ほかに芭蕉等亜熱帯性の植物も繁茂し，暖かい気候の程を示している。

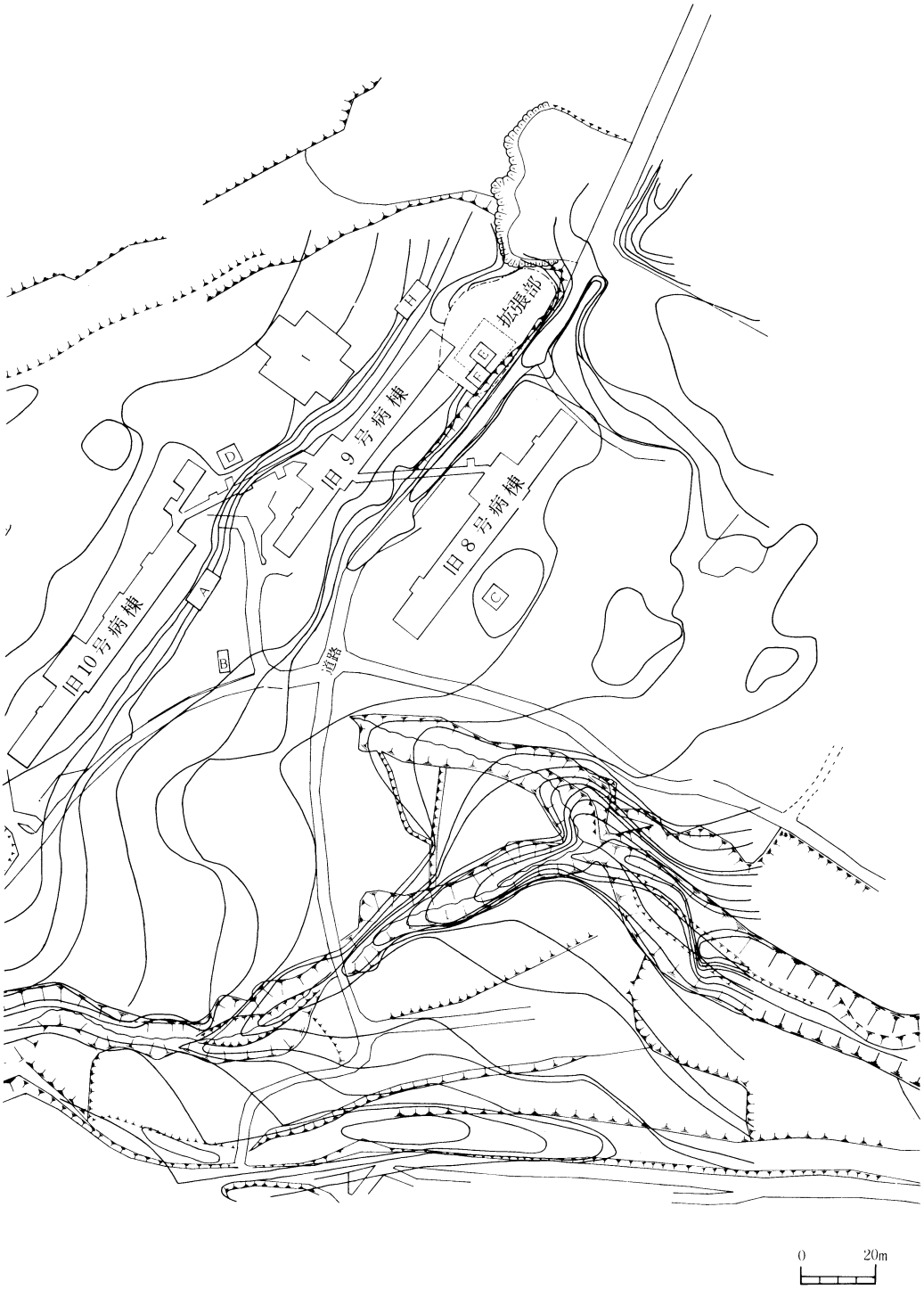
この遺跡のほか，火山帯と亜熱帯性気候の特性の中で古代の人々は生活し，多くの遺跡を残してきた。たとえば，本遺跡より北東１㎞の所には火山灰層を挟み弥生式土器と縄文式土器を出土し，その前後関係が注目され，現在では学史的価値としても貴重な橋牟礼川遺物包含地（国指定史跡）をはじめ，西南0.5㎞の火口壁の懸崖の地には，上層に弥生式土器，下層に指宿式土器と呼ばれる縄文時代後期の土器が出土する大渡遺跡，そのほか独特な埋葬施設，多くの人骨と，後に成川式土器と呼称され，現在にいたっても研究に欠かすことができない標準形式となった土器の出土する成川遺跡がある。

以上の代表的な遺跡のほか，南丹波遺跡，宮ケ浜遺跡，今和泉渡瀬遺跡等50ケ所に近い遺跡が点在している。そしてこれらの遺跡のいくつかは，４ｍにもおよび火山灰層下にようやく弥生式土器がみられるという火山地帯独自の遺跡の形相を呈している独自性もみせている。



番号	遺跡名	時代	出土遺物	番号	遺跡名	時代	出土遺物
1	新番所後		弥生式土器・土師・須恵器	8	山根貝塚	弥生・後	壷形土器・甕形土器・獣骨・貝殻
2	内山	縄文・中・後	指宿式土器	9	ぬくびら	弥生・後	甕形土器
3	大渡	縄文・後	指宿式・市来式土器	10	南丹波	弥生・後	甕形土器・甕形土器・杯土器
4	大山崎	縄文・後	指宿式・市来式土器	11	摺ヶ浜	弥生・後	壷形土器
5	成川	弥生・中・後	須玖式土器・甕棺・高杯・鉄剣	12	橋牟礼川	縄文・弥生	
6	福元洞窟	弥生・後	弥生式土器・骨角器・石器	13	福元	土師・須恵	須恵器・銅境
7	老田迫	弥生・後	壷形土器	14	神方	土師・須恵	須恵器

第1図　新番所後遺跡および遺跡分布図



第2図　遺跡周辺地形図

第３章　Ａトレンチの調査（第３図）

試掘トレンチの第１号として，旧10号棟（病棟）の東南部に10×２.0m を設け確認調査を進めた。その後拡張を続け，最終的に10×５.0m のトレンチになり深さは－７.0m にいたった。その結果，遺物は細片だけであり，また，散在していることがわかり密度は薄いという結論を得た。

１　層　順

１層　表土

２〃　客土・表土層とともに病棟設立に伴い造或されたもので，ガラス片，瓦等多くの雑物を含んでいる。

３〃　黒色の火山灰層で層としての締りがなく，サラサラしている。

４〃　褐色の火山灰層

５〃　褐色の火山灰層であるが，４層に比べて小礫が多くなっている。

６〃　紫色熔結コラ層で小礫が混入している。この層は，古来より「火コラ」と呼ばれ，耕作を著しく遅滞させた，非常に堅いコラである。

７〃　褐色の粒の荒い火山灰層

８〃　青灰色熔結コラ層，通称「青コラ」と呼ばれ，非常に堅いコラである。

９〃　褐色の火山灰層

10〃　黒褐色の火山灰層

11〃　暗紫色熔結コラ層で，この層は水により崩壊されており，部分的に分布していた。

12〃　黒褐色のきめの細い火山灰層

13〃　黄灰色のローム層で，５㎜大の軽石を含む。

14〃　砂層で青白砂と呼んでいる。

15〃　茶褐色のローム層で，１㎜大の円い軽石を含む。

16〃　15層よりもさらに粘質の強いローム層で，この層までが開聞岳火山放出物の堆積層と呼ばれている。

17〃　池田二次シラス

以上の層の堆積のなかで，10層を中心に成川系の土器片を包含していることを知ることができたが，いずれも細片であり，その詳細をつかむことはできなかった。また，15層のローム層のなかに，数点の古い土器片を含んでいた。

２　出土遺物（第３図，図版８）

１.

小形長頸壺と思われ，平底でヘラの横なでの調整がみられる。色調は紅褐色を呈し，焼成は

良好であるが，胎土に石英等の砂粒を多く含んでいるため，表面はザラザラしている。

2．

上げ底の台脚をもち，底面が直立した形となる。この台脚は，貼り付けと思われ，内外面は回転台を用いた水引き整形を思わせる刷毛痕がみられる。色調は黒褐色を呈している。焼成は良好であるが，胎土に多くの砂粒を含んでいる。

3．

鉢形土器の台脚部で，台脚部を貼り付けた後つくり出している。この貼り付けた一部が剝脱しているが，貼り付けた面に指頭による調整の痕を見ることができる。内外面ともにヘラによる横方向のなで調整が見られ，焼成は良好で，胎土は砂質が強くなっている。

4．

鉢形土器の台脚部で，淡褐色を呈し，焼成は良好である。胎土は非常に荒く，5㎜前後の石片もみられる。表面の剝脱が著しい。

5．

尖底の一部で，調整は内外面ともヘラ状のもので入念に施され，紅褐色の光沢をもった明るい色調を呈している。胎土の一部に繊維質のものを含み，一部には亀裂も生じている。

6．

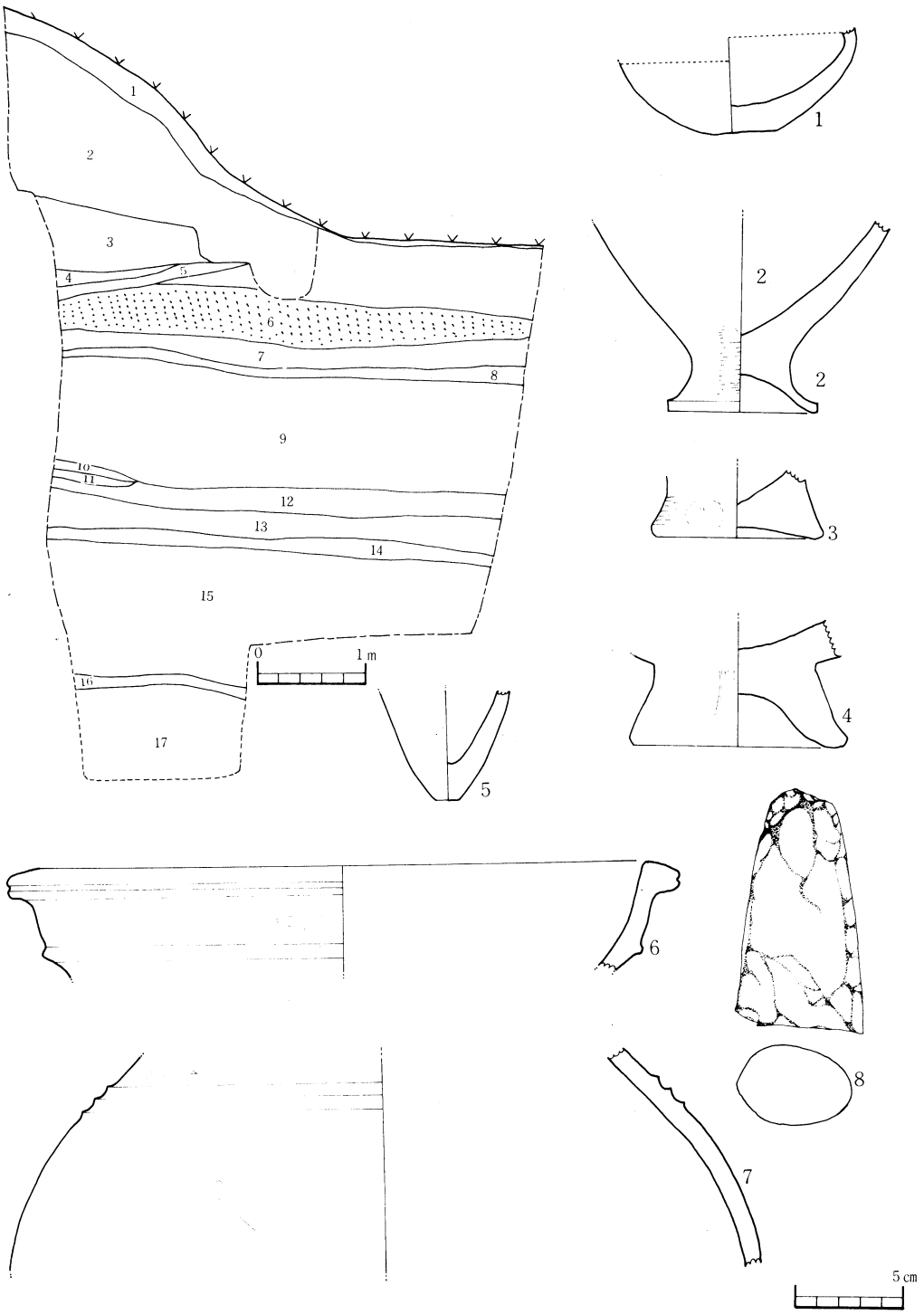
甕形土器の口縁部破片で，口縁部がL字形に外反し，一条の沈線を施している。また，頸部に2条前後の断面三角形の貼り付け凸帯をつけている。胎土には多くの砂粒を含み，焼成もやや低くなっている。

7．

頸部に断面三角形の貼り付け凸帯をもつ甕形土器の胴部破片で，頸部より土は横方向のなで胴部は斜方向のなでの調整が行われている。内面は凹凸が目立っている。色調は淡紅褐色を呈し，焼成は良好である。

8．

玄武岩製の敲打技法を用いた石斧で，断面は円形に近くなっている。頭部の一部にも使用されたと思われる痕跡が残つている。刃部は欠落している。



第3図　Aトレンチ東壁実測図・出土遺物実測図

第4章　B・Cトレンチの調査（第4図）

Bトレンチは校庭の南端部に位置し当初2.5×2.5mのトレンチを設け，その後2.5×6mに拡張した。深さ3.5mでシラス層にいたつたが遺物，遺構は存在しなかつた。

1　層　順

1層　校庭造成のための客土

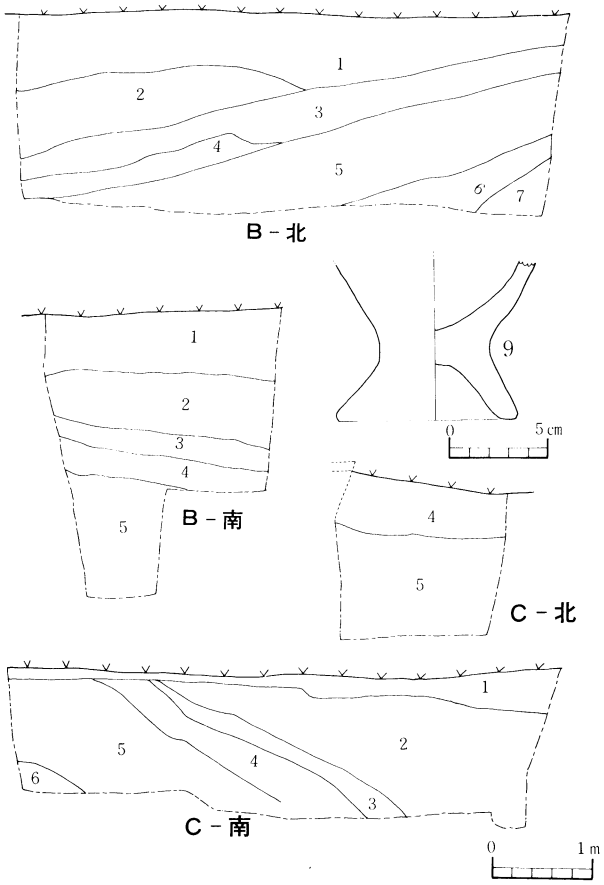
2層　黒褐色の火山灰層で部分的に分布堆積する。

3層　黄灰色の粘質を含んだ火山灰層で弥生中期該当の遺物包含層と推定されたが遺物の出土はなかった。

4層　青白砂で部分的に堆積する。

5層　茶褐色（粘質）火山灰層

6層　6層以下シラス層となる



第4図　B・Cトレンチ北・南壁実測図・出土遺物実測図

Cトレンチは農道をはさんでA，Bトレンチの南側に位置し標高58mm付近である。

調査は2×5m幅のトレンチを設定し順次発掘した。その結果深さ2mでシラス層に至つた。この地区も造成が激しく層順も上部は削平，地形的にも急傾斜であったため攪乱がめだった。

2　層　順

1層　造成のための客土でガラス等の雑物が多い。

2層　黒褐色の火山灰層で東に傾斜している。

3層　黄灰色のやや粘質をおびた火山灰層でやはり東に傾斜している。

4層　茶褐色の粘質をもつた火山灰層で傾斜は同じである。

5層　シラス層である。

3　出土遺物（第4図・図版9）

9.

脚台付鉢形土器で胴部内面にはヘラによる縦位のなで調整がある。胎土は石英，黒雲母などの砂粒を含み焼成も良くない。剝落がめだち表面はザラザラしている。色調は赤褐色である。

第５章　Ｄトレンチの調査

Ａトレンチの北東部標高65m の地点に位置する。

調査は５×５ｍのトレンチを設定して土層より順次発掘した。

この調査地点は病棟使用時代に使用された薬ビン等を投げ込んだ掘込みが２ケ所に存在し，しかも３層まで達していた。

１　層　順（第５図）

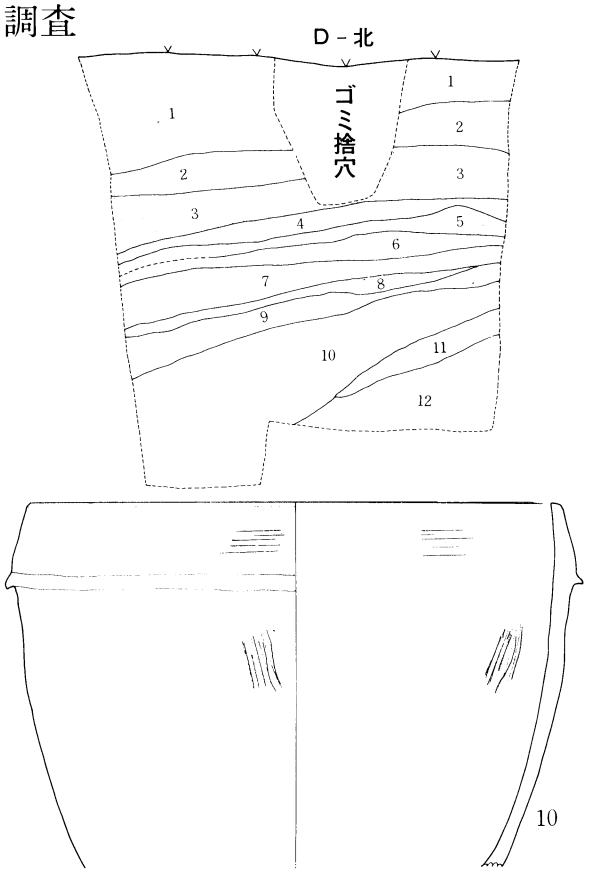
１層　表土層でこの表土は火山灰と腐植土で層を形成している。

２層　黒色火山灰層である。

３層　紫色熔結コラ層，いわゆる「火コラ」である。

４層　黄褐色でやや粘質がかった火山灰層である。

５層　青灰色熔結コラ層，いわゆる「青コラ」である。



第５図　Ｄトレンチ北壁実測図・出土遺物実測図

６層　褐色中粒火山灰層で，この層は層自体では締りがなくザラザラしている。

７層　褐色の中粒火山灰

８層　暗紫色コラ層

９層　黄灰色のやや粘質をおびた火山灰ローム層である。

10層　茶褐色の粘質をおびた火山灰ローム層である。

11層　シラス層で池田湖２次シラス層

12層　砂層

13層　シラス層で鉄分をふくむ池田湖１次シラス層

２　出土遺物（第５図）

10.

頸部に断面が台形の貼り付け凸帯を有する甕形土器片である。

口縁部は横位のナデ調整，胴部以下は縦方向のナデ調整で仕上げてある。

色調は淡褐色を呈し，焼成は良好である。

第6章　Eトレンチの調査（第6・7図）

10月28日より，試掘調査を開始し，柱穴と思われるPit を検出し，その確認のためEトレンチに平行して，Fトレンチを設けた。

その結果，5個のPit群を確認し，それに伴い数点の土器片を出土した。その結果に基づいて，400㎡を調査することとなったが，病棟造成時に，調査地域のかなりの部分を削平しており，また火山灰との色調の識別が極めて困難となり，明確に遺構として判断できるだけの資料を得ることができなかった。そこで，ここでは出土した土器片について説明してみた。

1　出土遺物

1層　表土で，多くの雑物を含んでいる。

2層　造成時のもので，種々の土壌を成している。

3層　紫色熔結コラ層

4層　黄灰色ローム層

5層　茶褐色ローム層

トレンチ中央部では，

1層　黒色火山灰

2層　青灰色熔結コラ

3層　黒褐色火山灰層

4層　暗紫色熔結コラ

5層　黄灰色ローム層

2　出土遺跡（第7図・図版10）

11.

甕形土器の口縁部破片で，断面三角形の貼り付け凸帯をもっている。焼成は良好，色調は暗褐色を呈し，胎土は砂粒が多い。

12.

頸部より上部にかけてやや内向する甕形土器の口縁部で，頸部に台形状の一条の突帯をめぐらせている。焼成・胎土とともに良好で紅褐色を呈している。この突帯は，貼り付けた後上下よりヘラで面取りを行ない，台形状にしたものに思われる。調整はヘラで縦方向と斜方向に行なっているが，ヘラとヘラの間にはススが付着している。

13.

胴部にきざみをもつ貼り付け突帯を有する甕形土器で，口縁部はわずかに内向している。器面はヘラの横方向なでの調整で仕上げられ，口唇部は平担に面取りされている。焼成は極めて堅緻で良好であるが，胎土は多くの砂粒を含んでザラザラしている。

14.

頸部に一条の三角突帯を有する甕形土器で突帯を貼り付けた後，ヘラの横なで調整で仕上げている。色調は明褐色を呈し，焼成は良好であるが胎土に多量の石英・黒雲母などの砂質を含み，ザラザラしており，また所々に亀裂も見られる。

15.

頸部に，きぎみをもつ貼り付け突帯を有する鉢形土器の破片で色調は淡褐色を呈する。焼成は良好であるが胎土に多くの砂粒を含み，亀裂も見られる。

16.

鉢形土器の口縁部破片で，口縁部に黒班がみられる。外面は調整が行き届き，ツルツルしている。胴部以下ではヘラの縦方向のなでの調整が残って凹凸が見られる。色調は黒褐色を呈し，焼成は良好である。

17.

胴部以下を欠失しているが，甕形土器で頸部で外反する形となる。口唇部は，ヘラで面取りされ，平担になっている。内面はヘラによる横方向のなでの調整が行なわれ，外面は口縁部付近では縦方向，胴部では横と斜方向のなでの調整で仕上げられている。胎土は微粒であるが石英等を含んでおり，ススが大量に付着している。

18.

鉢形土器の口縁部で頸部はくの字形に外反している。ヘラによる横方向のなで調整を行ない，胎土は荒く，表面はもろくなり，多くの繊維痕もみられる。

19.

鉢形土器の破片で，胴部がはり，頸部はくの字状に曲折し，口縁端は内向するように整形し，その上にヘラ状のもので一条の沈線を施している。頸部より口縁部にかけてはヘラで横方向になで，胴部以上は，斜方向になで調整している。焼成は良好で，色調は赤褐色で上面はススが付着し，特に頸部が著しい。胎土は石英等の細石片が多い。

20.

台脚付鉢形土器で，底部と台脚部接合部にヘラによる調整のあとが残っている。色調は紅褐色を呈し焼成は良好であるが，胎土に多量の砂粒を含んでおり黒雲母等が目につく。

21.

台脚付鉢形土器でかなり大形であったと思われる。器体外面と底部内面はヘラにより縦方向のなでの調整がみられ，台部内面はヘラによる横方向のなで調整を基に行なっている。色調は淡紅色で焼成は良好である。胎土は砂質がかなり含まれており，もろくなっている。台部の一部には黒班もみられる。

22.

台脚付鉢形土器の台脚で，外面もヘラで調整したと思われるが，剝脱が著しく，明瞭に観察できない。内面はヘラによる横方向のなでの調整が観察できる。胴部と台脚部の接合部で亀裂

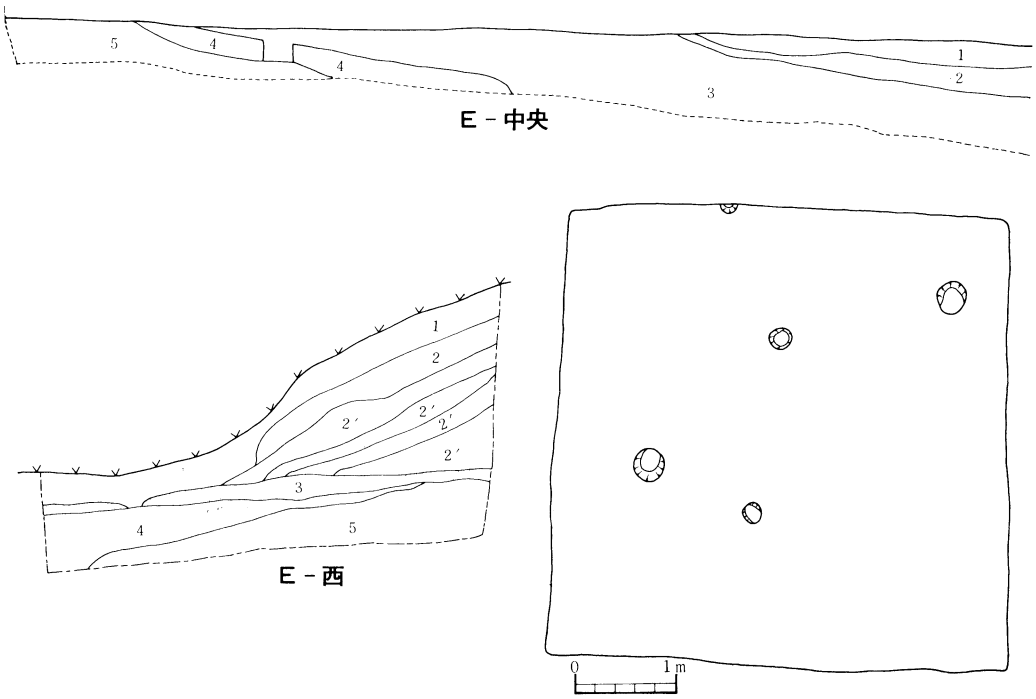
を見ることができる。表面の剝脱は激しいが，焼成は良好で色調は赤みがかった褐色を呈している。胎土は砂粒を含んで砂質が強い。

23.

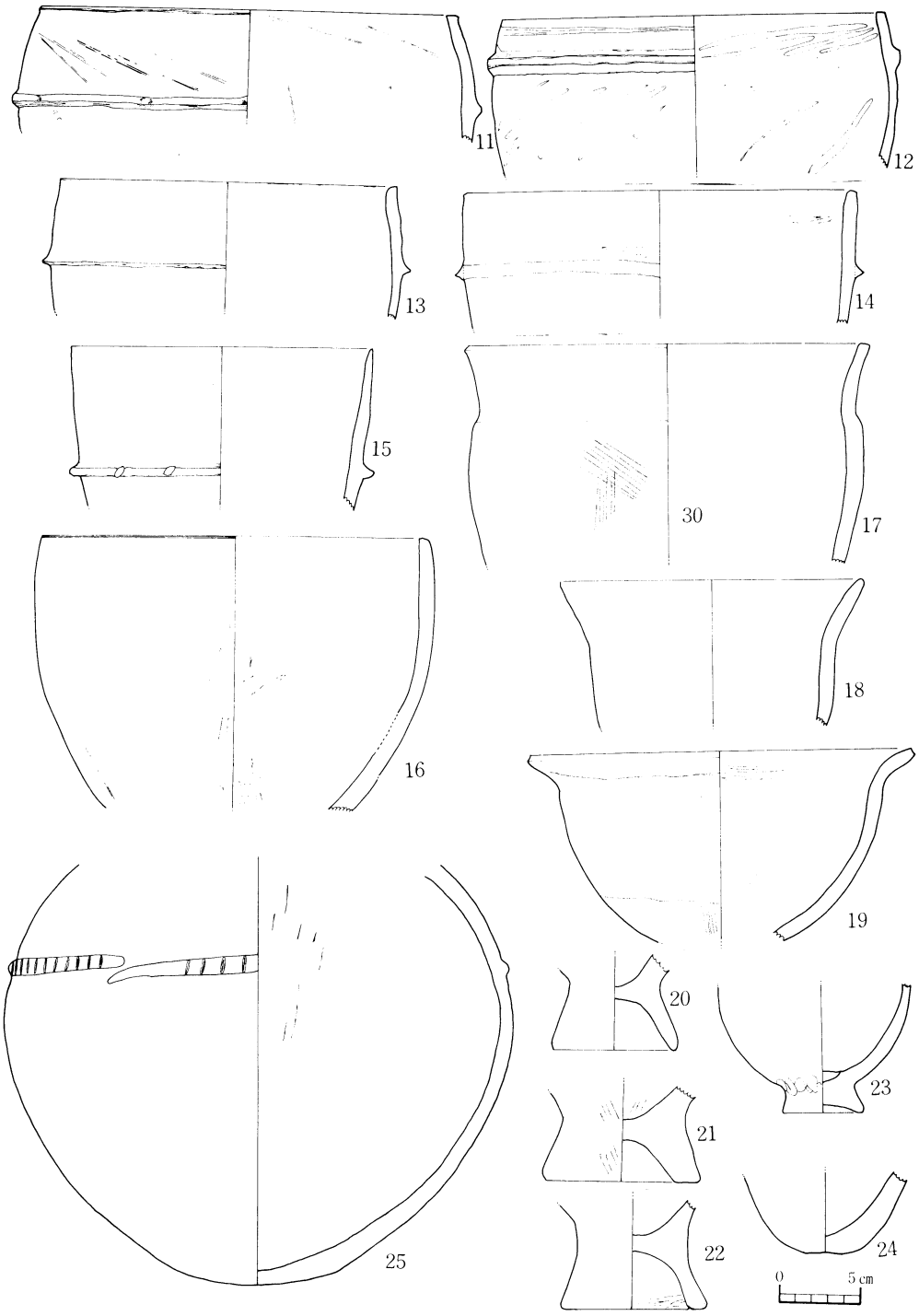
鉢形土器は，口縁部を欠失しているが胴部が丸みを帯びた椀に近い形態を呈す。浅いあげ底の台脚をもつが，底部と台の間は指頭痕跡が見られ，この台脚はつくり出しによるものと思われる。胴部の外面は凹凸が見られるが，ヘラ様のものでなでられ，内面はヘラによる横方向のなで整形で仕上げられる。台脚部は外面・内面とも指頭によってなでられている。色調は黄みを帯びた淡褐色を呈し，胴部と台脚部に各１ケ所，黒班を見る。焼成は良好であるが，胎土に黒雲母，石英などの砂粒を多量に含んでいる為，各所に亀裂がみられる。胎土中には，繊維質のもの５㎜前後の細石粒なども含まれる。

24.

底部が丸底の鉢形土器で，ほとんど欠損にいる。器肉は厚くヘラによる荒い調整がなされている。胎土には多くの砂粒・石片を含んでいる。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。



第６図　Ｅトレンチ西・中央壁実測図・Pit 群



第7図　Eトレンチ出土遺物実測図

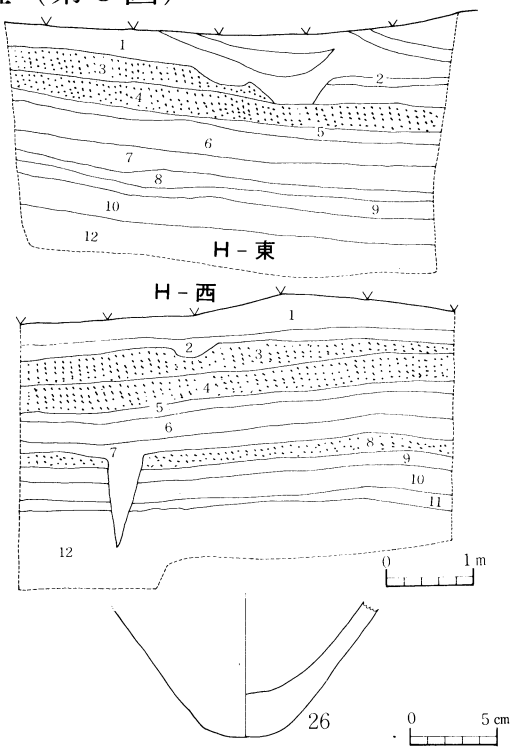
第７章　Ｈトレンチの調査（第８図）

Ｈトレンチは Ｅトレンチの北側に位置し標高は64m である。

調査は５×10m のトレンチを東西に設定した。

この調査区における所期の目的はＥトレンチで出土した遺物の分布範囲を把握することであった。

その結果５層褐色粗粒質火山灰層中より数点の土器片が出土したのみであった。



第８図　Ｈトレンチ東・西壁実測図・出土遺物実測図

１　層　順

１層　黒色火山灰が基盤となっておりその中に現代の攪乱された土壌が混入していた。

２層　１層よりもやや白色の砂層で部分的に分布している。

３層　紫色の熔結したコラ層でいわゆる「火コラ」と呼ばれるものである。

４層　褐色の火山灰層で部分的に不規則に青灰コラ「青コラ」がはいりこんでいるが，一括して青灰色コラ層とした。

５層　褐色の粗粒質火山灰層

６層　黒褐色細粒質火山灰層

７層　黒褐色小粒質火山灰層

８層　暗紫色熔結コラ層

９層　暗黒褐色細粒質火山灰層

10層　黄灰色の粘質をおびた火山灰層

11層　西側部分にだけみられる青白砂層

12層　茶褐色の粘質火山灰層

２　出土遺物（図版11）

26.

底部が尖底に近い鉢形土器で底部の最大部が２.７cmを測る。器面内外共に，縦，横，ななめ方向からヘラ状のもので整形され，特に外面は光沢を帯びている。

色調は明かるい褐色になり底部の左右に黒班がみられる。焼成は良好であるが，胎土は荒く石英などの砂粒が表面に浮き出している。

第８章　Ｉトレンチの調査(第9･10･11図･図版2･3･4･5･11)

旧10号棟の北側で，造成工事に着工した鹿児島県開発公社の「発見」との連絡により，急拠出土した場所の東側に５×５.0m のグリッドを設け，その内の14個，350㎡を調査した。その結果，この地区では，二つの文化層が存在することを確認した。まず，第２層の黒色火山灰層の最下部に存在する土師器，須恵器の文化層でPit 群も存在した。つぎに，第８層の黒褐色火山灰層に，数点ではあるが，成川系の土器片が存在した。

1　層　順

１層　表土，腐植土により形成されていたが，ブルドーザーにより削平した。

２層　黒色火山灰層

３層　黄褐色粒質火山灰層，この層は一部に分布

４層　紫色熔結コラ層

５層　黄褐色の弱粘質火山灰層

６層　青灰色熔結コラ層

７層　褐色中粒質火山灰層

８層　黒褐色細粒質火山灰層

９層　暗紫色熔結コラ層

10層　黄灰ローム層

11層　青白砂，部分的に分布

12層　茶褐色ローム層

2　出土遺物（図版５・11）

27.

平底の土師坏で，ロクロにより巻き上げられている。焼成・胎土ともに良好で，色調は赤褐色，外面の胴部より上にかけてはススが付着して黒くなっている。

28.

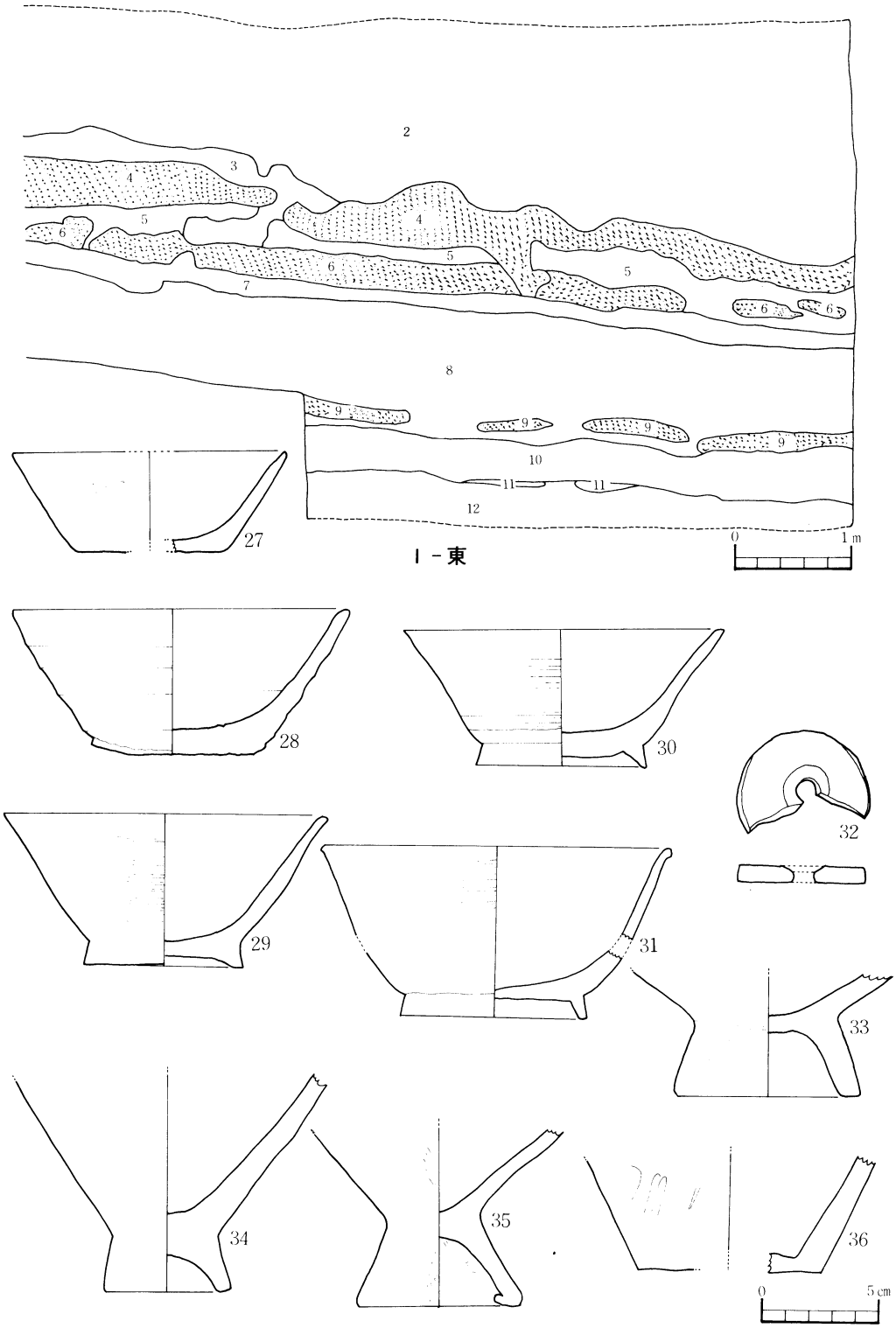
口径13.7cm，底部径７.3cm，高さ５.8cmの高台付土師坏であり，きめの細い胎土を用いているが，所々に５mm前後の石粒が混入している。内面の調整は入念に行なわれているが，外面では下半部に凹凸が見だっている。色調は淡褐色。

29.

淡紅褐色を呈する土師坏で，焼成は良好で胎土もきめの細いものを使用しているが，５mm前後の石粒が数ケ所に見えている。底部の仕上げが粗雑なため，一見貼り付けたような形となり底面も凹凸が激しい。

30.

口径13.8cm，底部径６.8cm，高さ６.5cmを測る高台付土師坏である。巻き上げ調整の痕もよく残っている。内面は黒く仕上げられた，いわゆる内黒土師で入念な調整が施され，光沢をも



第9図　Ⅰトレンチ東壁実測図・出土遺物実測図

ちツルツルしている。色調は淡黄褐色を呈し，焼成は良好である。

31.

高台付土師坏で，口径15cm，底部径８.２cm，高さ７.２cm，高台高０.８cmを測る。きめの細い良質の胎土を用い，色調は淡褐色を呈し，内面には丹を塗つている。

32.

紡垂車の破片で，一部を欠失している。直径５.７cm，中央孔０.８cmで土師杯の底部を再利用している。

33.

鉢形土器の台脚部で，焼成は良好であるが，胎土に砂粒が多く剥脱が激しい。

34.

台脚部で，胴部はかなり開いている。調整はヘラで各方向に行ないその時のダマが残されている。色調は灰褐色で焼成は良好である。底部と台脚の接合部分に亀裂が生じている。

35.

台脚部で，入念な調整により光沢をもっている。焼成は良好，淡褐色を呈している。

36.

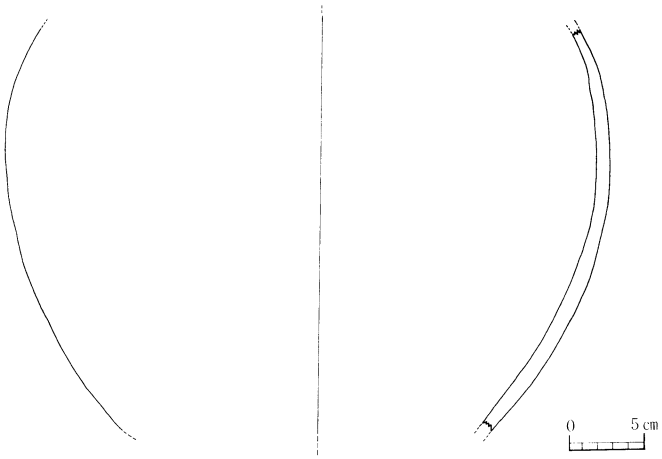
平底の鉢形土器で，全面に凹凸がみられる。

37.

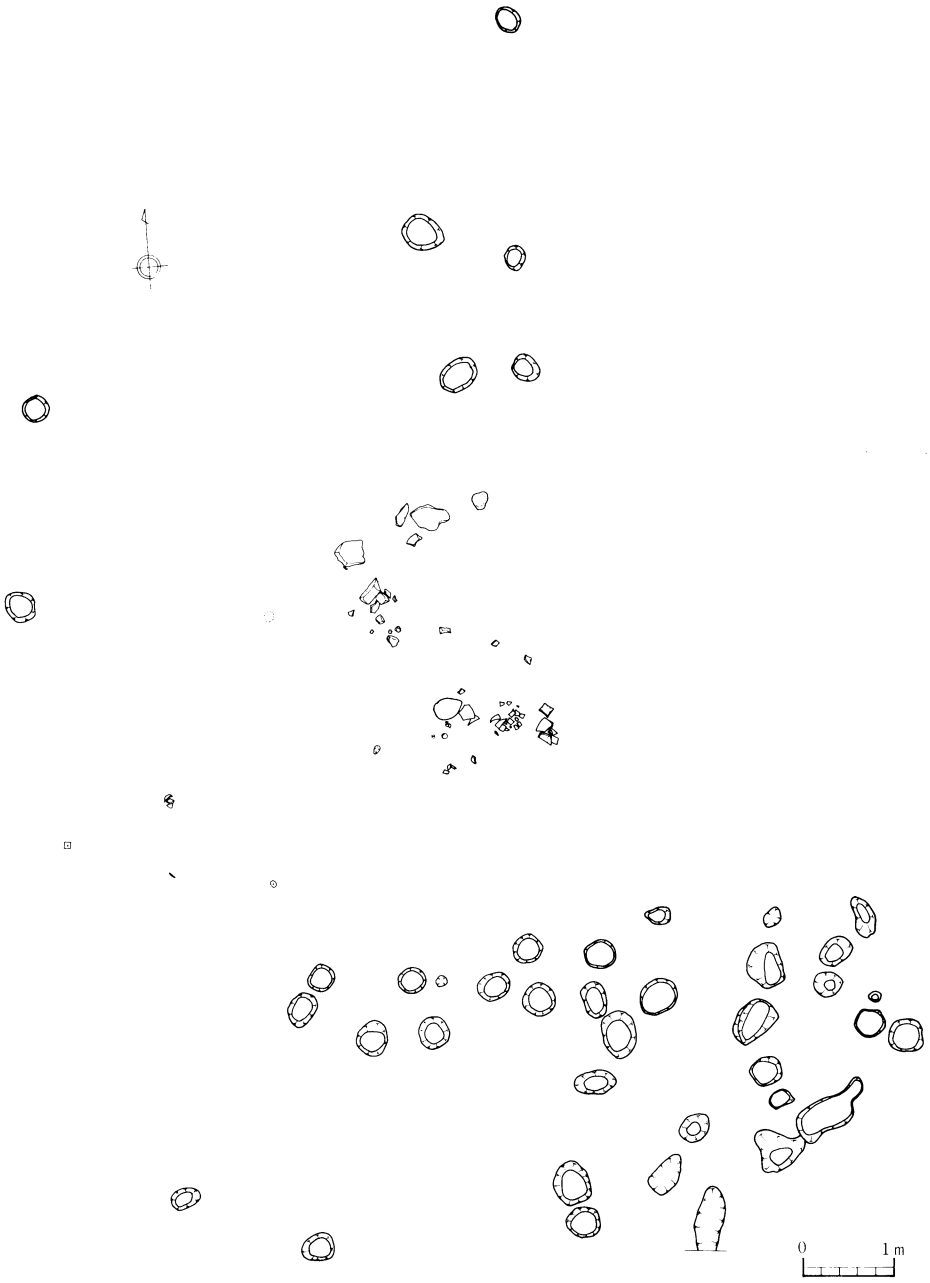
須恵器の甕で，外面は条痕叩き，内面は上部は青海波，下部は条痕の叩がみられる。

遺　構（第11図・図版11）

須恵甕片とともに，多くのPit 群を検出したが，遺構の再現までいたっていない。特長として，かなりの傾斜地に乱立していた。



第10図　Ｉトレンチ出土須恵器実測図



第11図　Ⅰトレンチ出土遺構実測図

第９章　特別地点の調査(第12・13・14図・図版6・7・12・13・14)

この地点は新校舎敷地の境界に相当する部分で，側壁工事中に発見された場所である。
その結果この地域がこれまでの調査した地点内で最も濃密に分布していることがわかった。
しかしながら地域外という条件もあり遺物の採集にとどまった。

1　層　位

1層　表層
2層　黒色火山灰層
3層　紫色熔結コラ層
4層　褐色ローム質火山灰層
5層　青灰色熔結コラ層
6層　黒褐色火山灰層
7層　褐色中粒質火山灰層，この層が包含層である。またこの地域は，尾根に続く傾斜地に相当し，かなりの角度をもっている。

2　出土遺物（図版12・13・14）

38.

口径23.5cmの壷形土器であり，頸部に貼り付けの凸帯をもち，貝殻の押圧による刻みを施している。胎土は，良質のものを用い，ヘラの横方向なでの仕上げによりツヤのある表面をなし茶褐色を呈している。

39.

頸部より口縁部にかけて，わずかに内向する甕形土器の破片で，頸部に刻みをもつ一条の凸帯をめぐらしている。胎土は，わずかに黒雲母の細粒を含んでいるが良質のものを用い，焼成も良好で，光沢をもっている。調整もていねいに行ない，表面にススの付着をみるが，本来は丹塗の土器だったものと思われる。

40.

頸部に，断面が台形状の貼り付け凸帯をめぐらした甕形土器で，この凸帯は，結合しない。器体は，ヘラの縦方向なでの調整で仕上げられ，焼成は良好で，ススの付着がみられる。

41.

頸部に，丸みをもつ一条の貼り付け凸帯をもつ甕形土器で，内外面ともヘラの横方向なでの調整を施している。焼成は，かなり良く行なっているが，胎土に多くの砂粒を含んでいるために，ザラザラしている。

42.

口縁部をわずかに欠失するが，短頸の壷形土器と思われる。底部は丸底となり，全体に器肉

は厚い。内面調整の不ぞろいが目立ち，頸部では，はりつけの指頭の痕が点々と残っている。また，ヘラ調整の痕が残り内面は凹凸が激しくみられる。底部に近い所に，各一ケ所の黒班がみられる。

43.

頸部よりなだらかに外反する鉢形土器で，赤褐色を呈する。内面では，横方向なでの調整を行ない，頸部では，段がついている。外面では，縦方向のなで調整を行ない，焼成は堅緻で良好であるが，胎土が荒く石英などが浮き出ている。

44.

鉢形土器の口縁部破片で，わずかに外反する器形となっている。焼成はやや弱く，また，胎土も砂粒などが多く，そのために表面が剝落している。

45.

胴部がふくらみ，口縁部が外反する，甕形土器の破片で色調は，褐色を呈している。この土器も，表面の剝落が激しく，軟弱になっている。

46.

丹塗り高坏で，一部を欠いているがほぼ完全なものである。高さ15.0cm・坏部の口径14.2cm脚部端の径10.2cmを計る。坏部は，高さ4.5cmと割に深く，口縁部と底面の間に明瞭な線をもち，外反しながら口縁端にいたる。脚部は，長い筒部からゆるやかに広がりながら脚端にいたり，内部は接合部近くまで空胴になっている。坏部と脚部は別々につくられており，接合部に近い所の筒部は若干ふくらみをもつ。坏部の内・外面，脚部の外面はヘラによってていねいになでられ，その上に濃い紅色の丹が塗られている。脚部の内面はヘラでなでられ，脚端に近い所のみに丹がみられる。

47.

大形の高坏の坏部と思われ，口径27.0cm・坏部の高さ10.0cmを計る。この坏の場合は，底面から口縁部にかけてゆるやかに外反していくが，口縁部の割合が大きくなっている。内面ではヘラによりなでられているがその仕上りは荒く凹凸が目立つている。外面では，ていねいにヘラでなでられている。底面の一ケ所に黒班がみられる。

48.

椀形土器で，丸底になっている。器形は，胴部が軽くふくらみ，口縁部で外反している。器肉は薄く，胎土・焼成とも良く，紅褐色を呈している。

49.

甕形土器の台脚部破片で，台脚部末端で外反する形となっている。調整はヘラにより，上部で縦方向，下部で横方向になで，焼成は良好であるが，胎土に多くの砂粒を含んでいるために浮き出している。

50.

平底の鉢形土器と思われる。色調は，淡褐色を呈し，光沢をおびている。焼成は良好である

が，胎土に黒雲母等の砂粒を多く含んでいる。

51.

台脚付鉢形土器で，台脚はやや内向し，底面の内側には，未調整の「はみだし」が残っている。また，内・外面の各一ケ所に黒班もみられる。淡紅色を呈し，焼成は極めて良好である。

52.

鉢形土器の台脚部で，外面に，ヘラによる縦方向なでがみられ，調整は荒く，凹凸がみられる。内面は，横方向になでられている。焼成は良好であるが，胎土は荒く，砂粒が浮き出ている。

53.

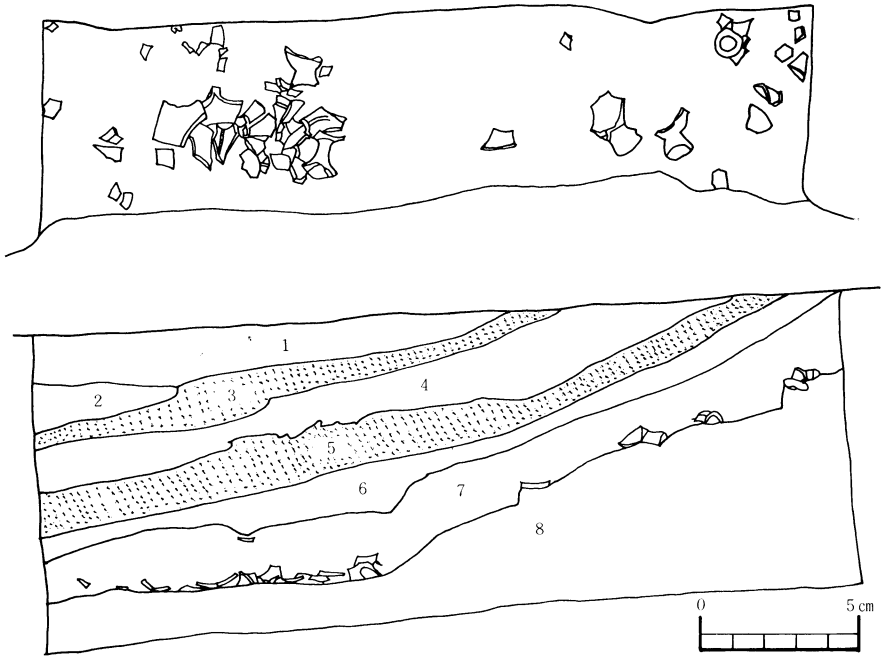
小形の鉢形土器の台脚部で，上げ底ふうに低くなっている。台形の整形は，指頭により広げられた後，ヘラ状のもので調整している。多くの亀裂がみられるが，これは胎土の粗雑さによるものと思われる。

54.

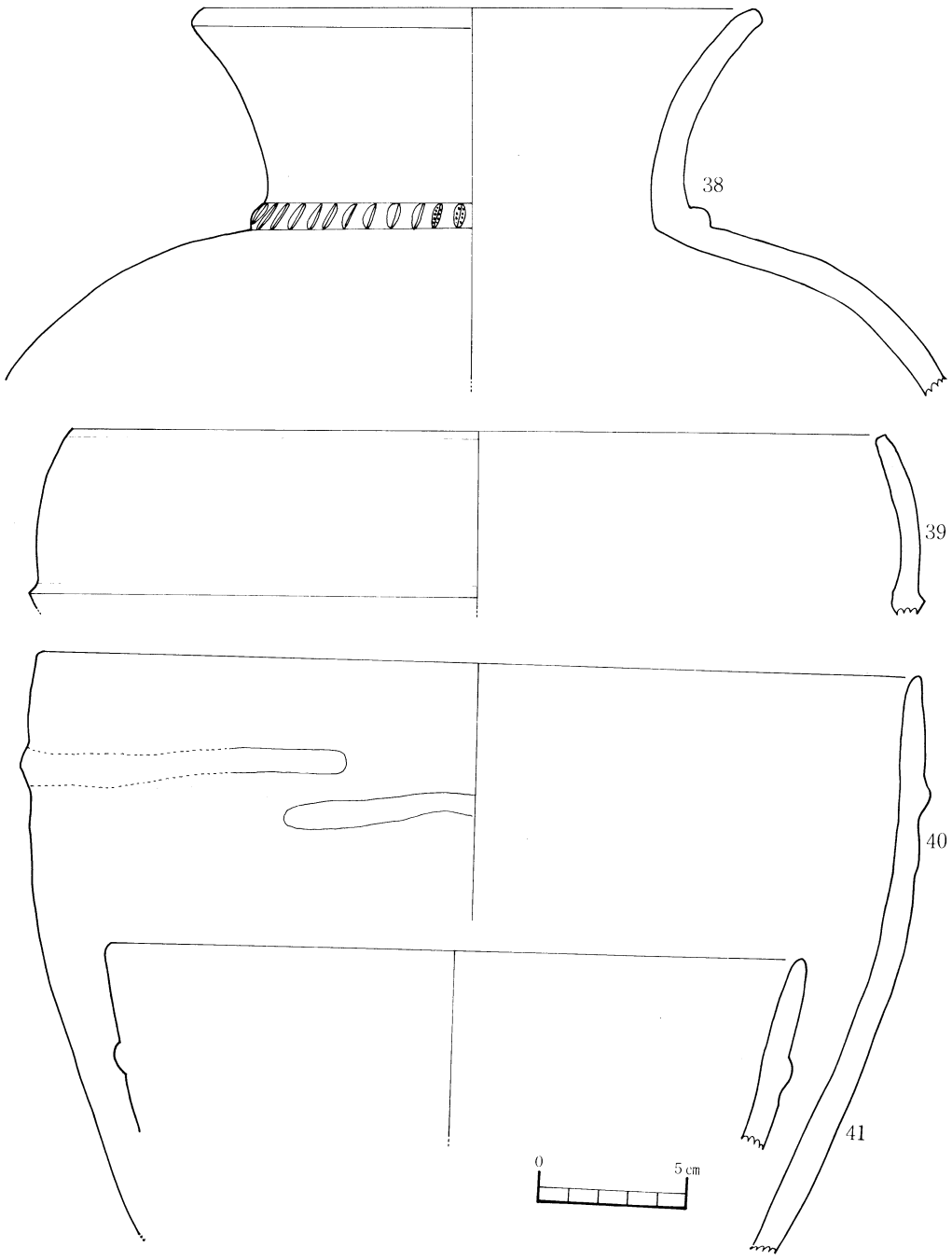
浅い上げ底をもつ台脚で半分は欠失している。この欠落した部分では，底部の上に台脚をはりつけた痕を観察することができる。

55.

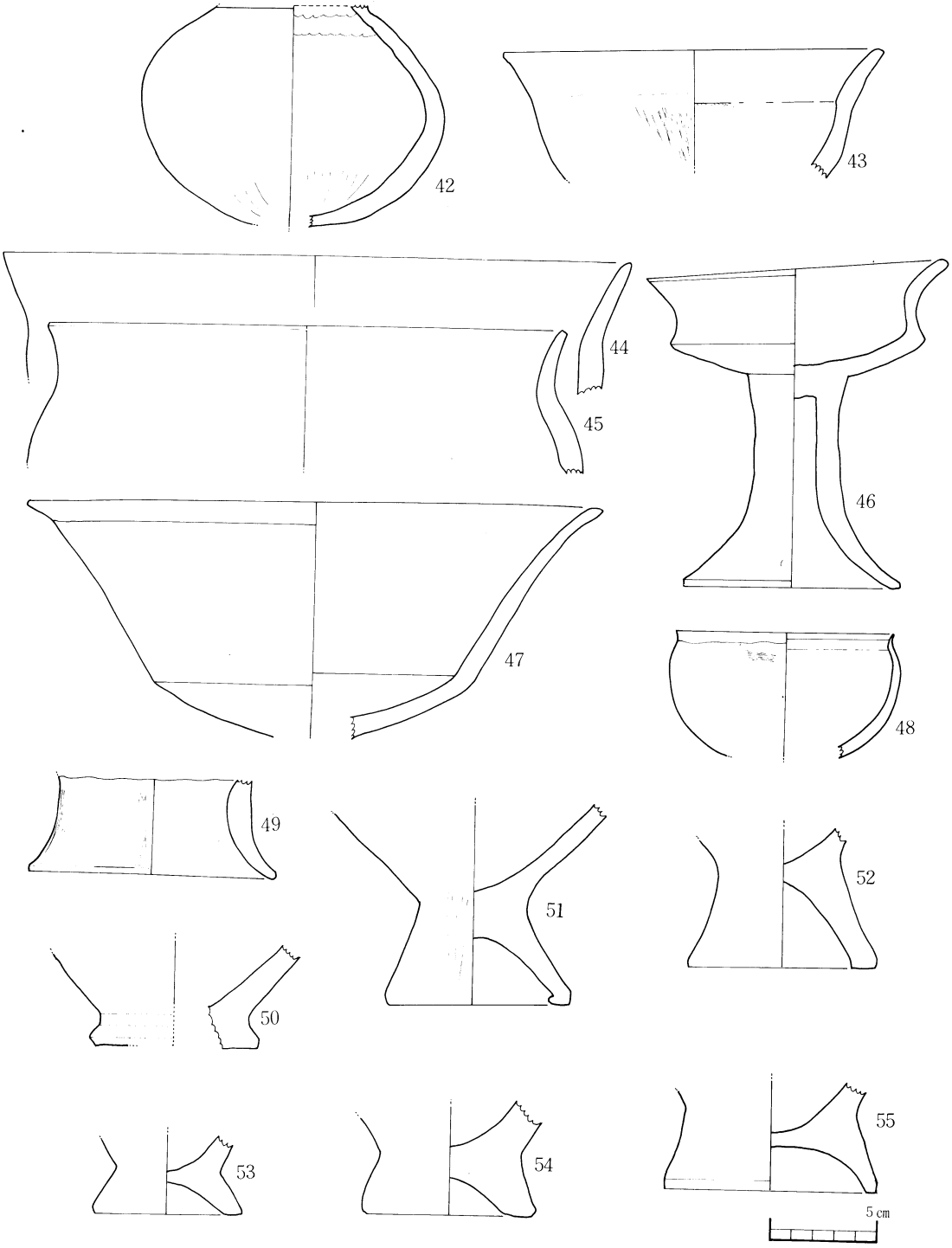
鉢形土器の台脚部で，外面は，ヘラによる縦方向なでの調整が施され，紅褐色のツヤのある色調を呈している。内面も黒褐色の光沢をもっている。



第12図　特別地点遺物出土状況と土層図



第13図　特別地点出土遺物実測図



第14図　特別地点出土遺物実測図

第10章　ま　と　め

以上，県立指宿養護学校の設立に伴って発掘調査した新番所後遺跡についてその概要を記したが，広範囲な上に火山灰地帯という特殊な条件も重なり，限定された範囲でしか調査できなかった。したがって遺構や出土遺物の量は少なかった。しかし個々の遺物は貴重であり，この報告の作成を行なった。

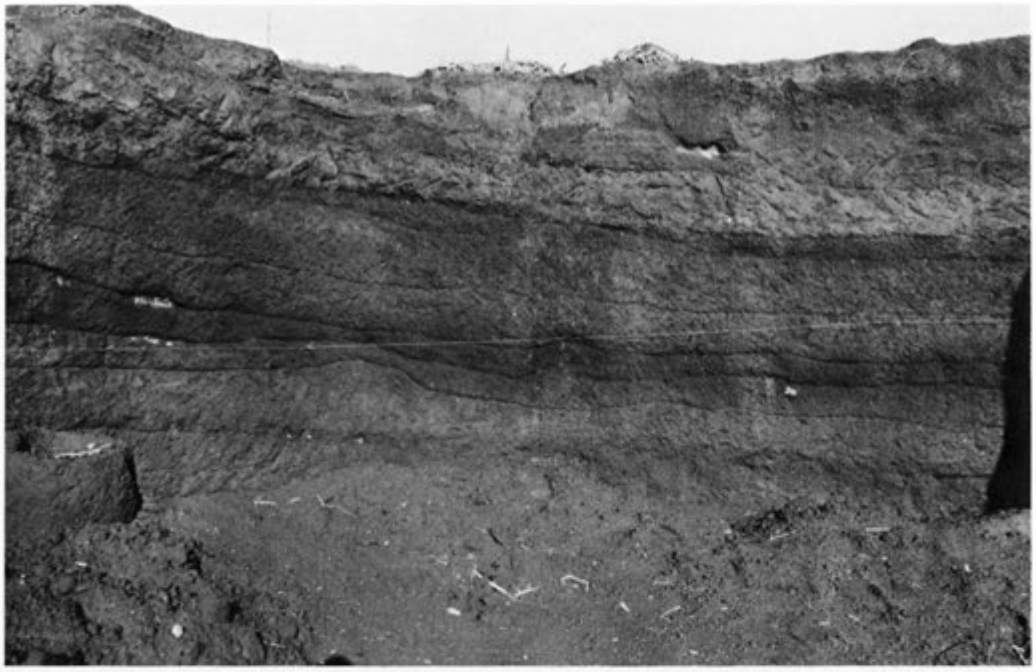
調査は，旧病棟の残存するなかで，そのわずかな間をぬって行なわねばならぬという条件のもとにあり，草木が繁茂していた為に困難を加えた。したがって調査できる地域は，おのずと限定されることとなり，校庭となっていた旧10号棟の東南部にＡトレンチを設定することとなった。

Ａトレンチでは２つの文化層があり，弥生時代後半と弥生時代中頃の文化であった。

まずその１つは，第９層・第10層を中心とする成川系の土器文化であり，この文化層までの深さは－３.5m であった。次に第15層の中に深さ－６.0m に存在する山之口系の土器文化であった。しかし，この文化層までは－３.5m，－６.0m という我々の当初の予測をはるかに上回ってしまった。さらに－３.5m に達するには，山鍬でも火花を散らす二枚のコラ層を取り払わねばならなかった。

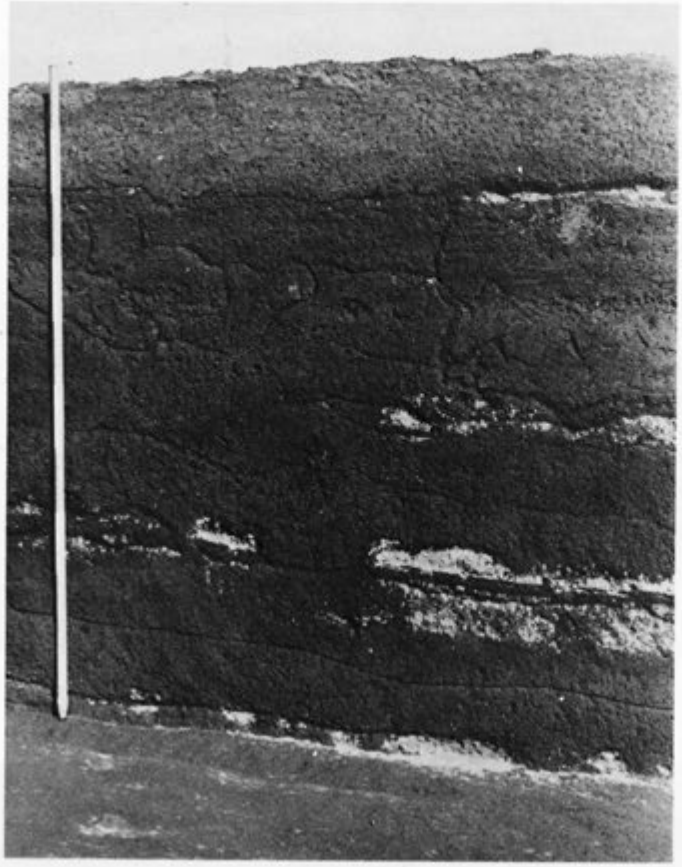
Ｉ地区では，黒色火山灰層の下部に土師式の土器文化が柱穴状の遺構を伴って存在したが，色の識別が極めてむずかしく十分に検出したとは言えない。また最後の工事中に発見された部分では，敷地外に文化層が残存している。

このような条件のなかで今回調査を行ない，知ることのできた当時の社会の様相は，そのほんの一部にすぎなかったのである。



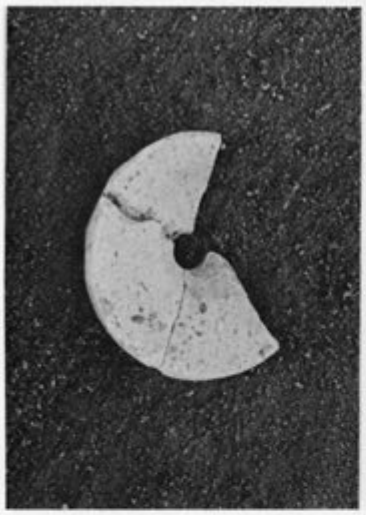
図版 1　Dトレンチ調査風景・土層

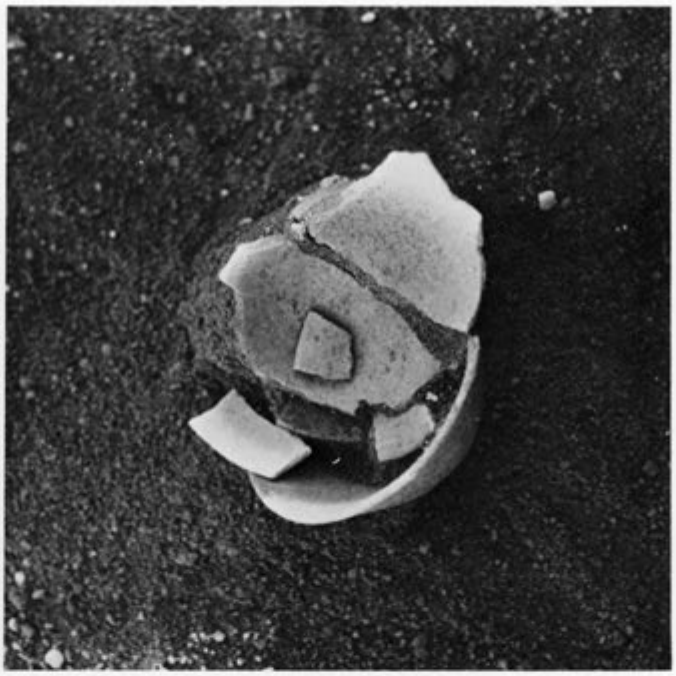
図版 2　Ⅰトレンチ調査風景



図版 3　Ⅰトレンチ東側土層

図版4　ⅠトレンチPit 群

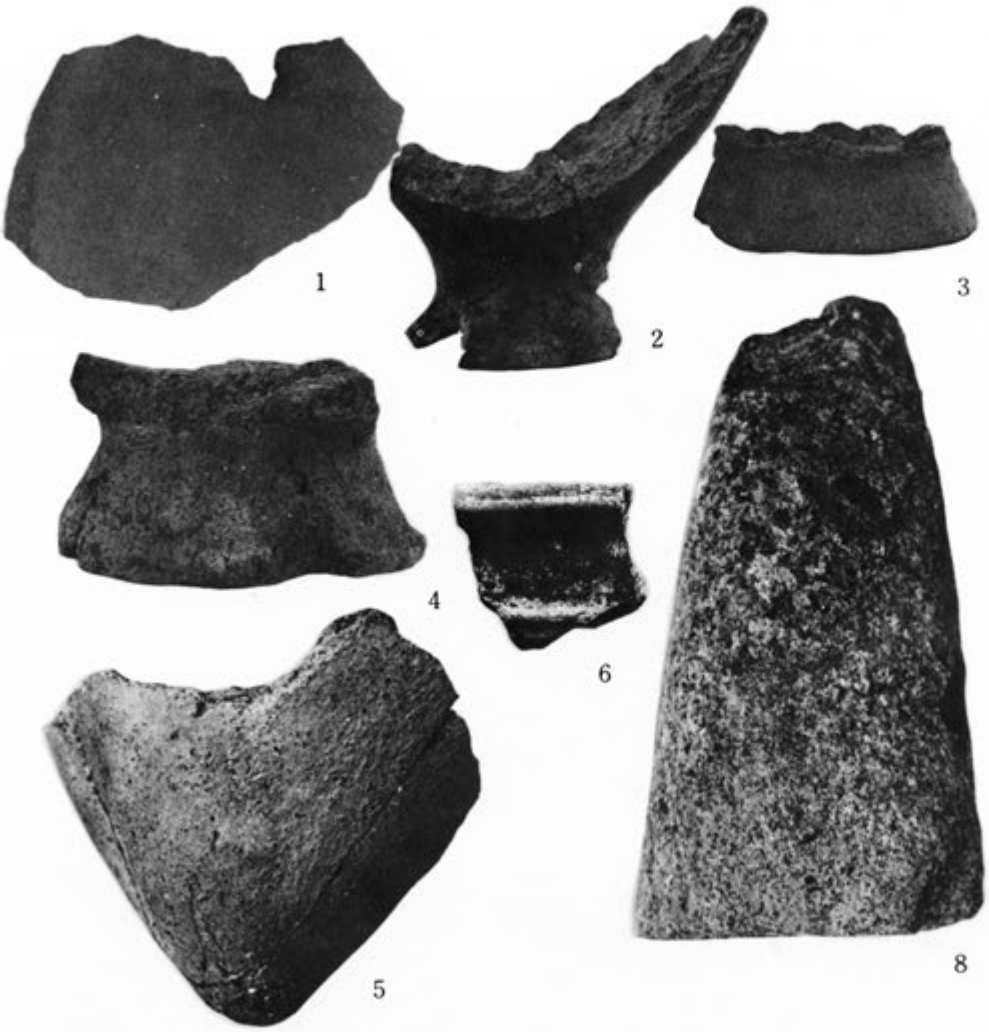


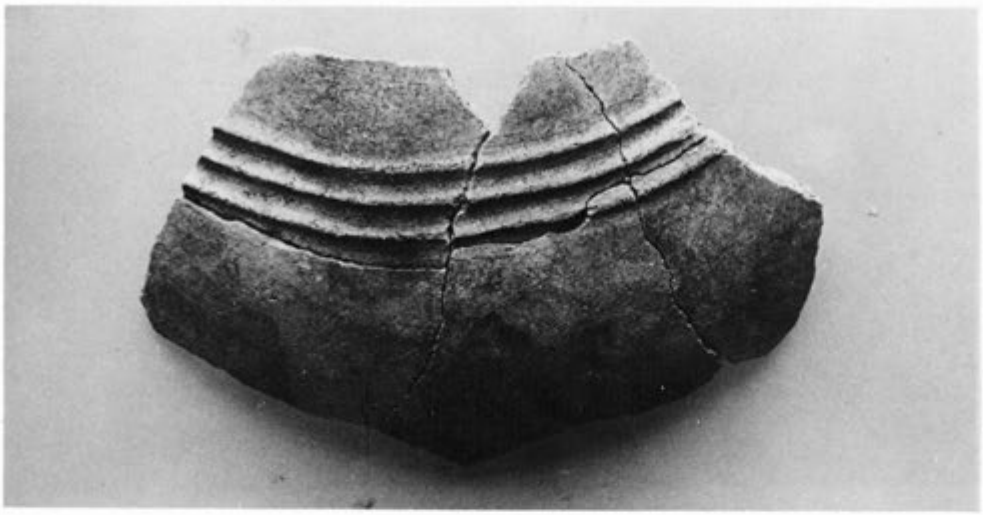


図版 5　1トレンチ須恵器・土師器・紡垂車出土状況

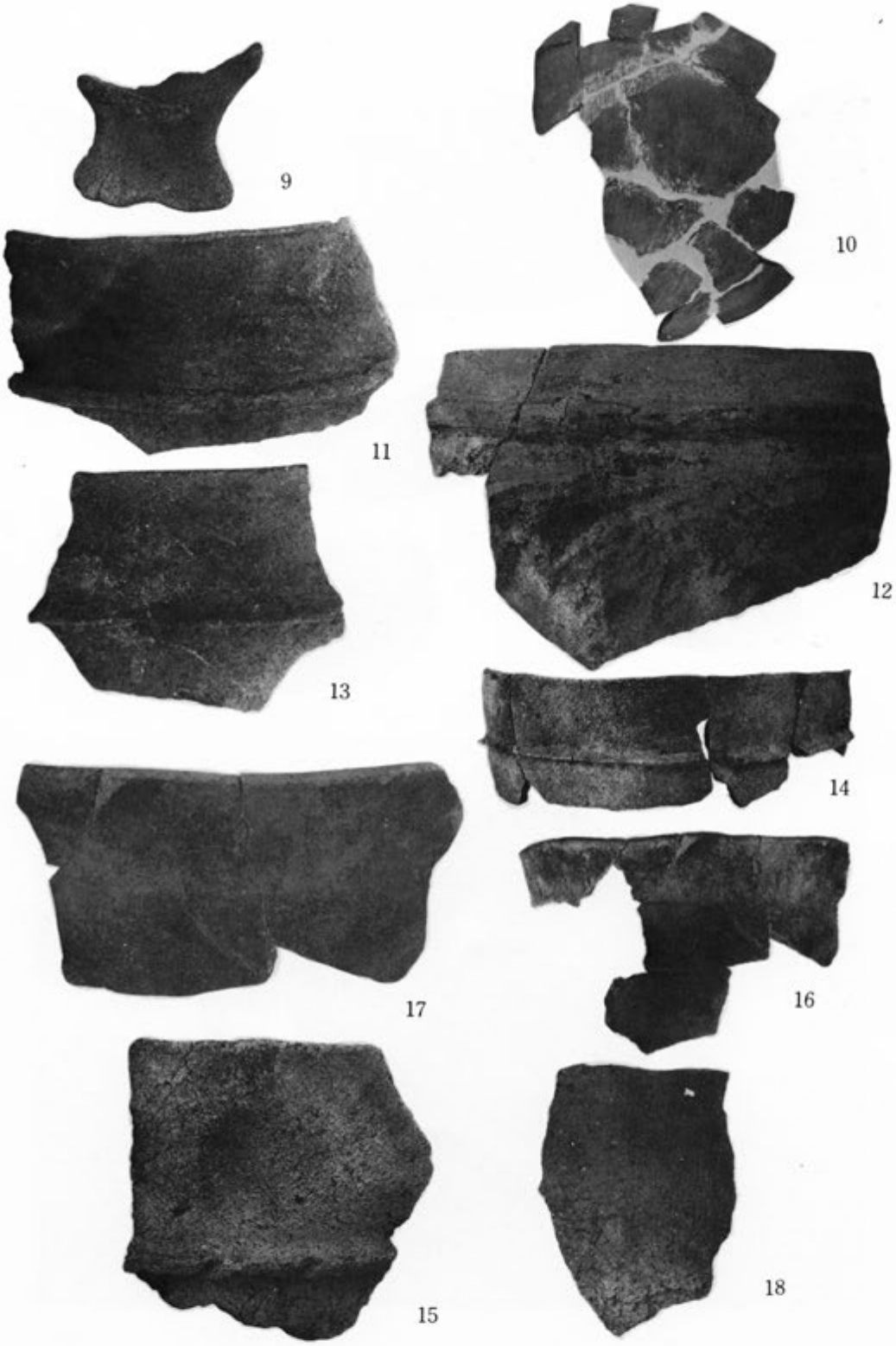
図版 6　特別地点遺物出土状況

図版 7　特別地点遺物出土状況





図版 8　Aトレンチ出土土器・石器　　7



図版 9　C・D・E トレンチ出土土器

20

21

22

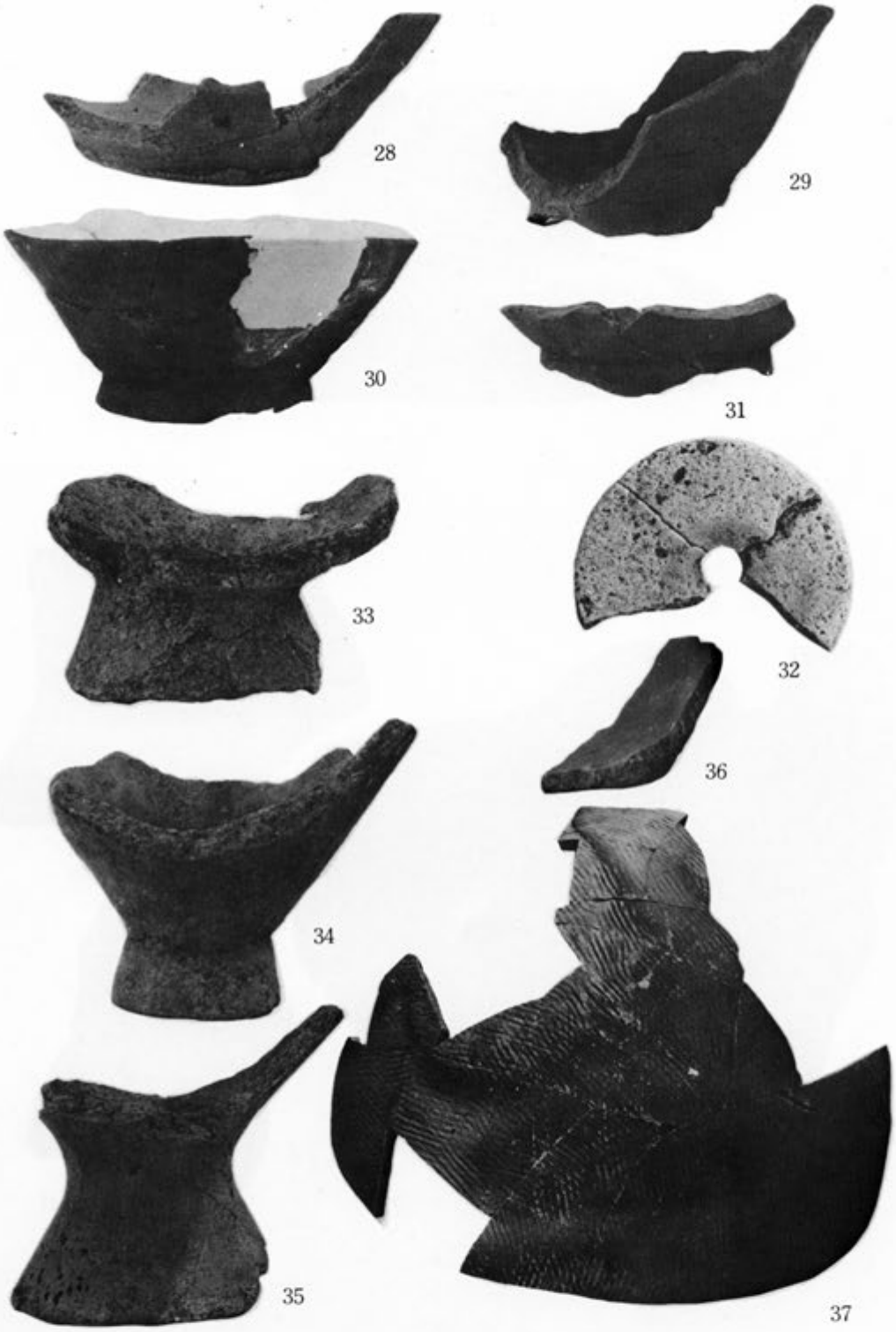
23

24

26

25

図版10　Eトレンチ出土土器



図版11　Ⅰトレンチ出土土器

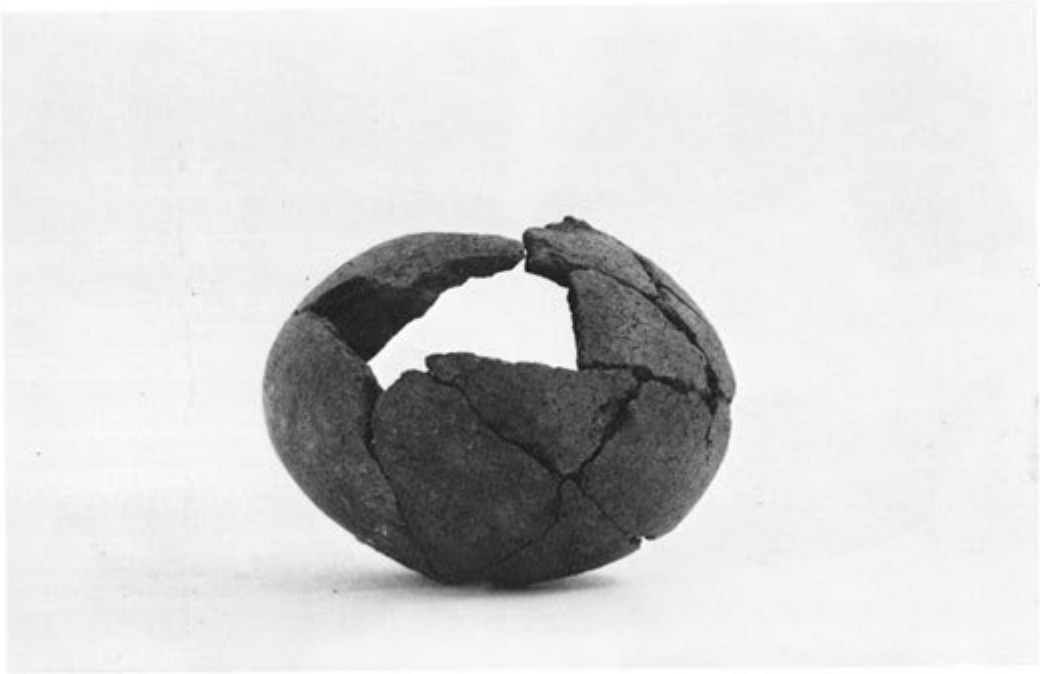
38

40

45

41

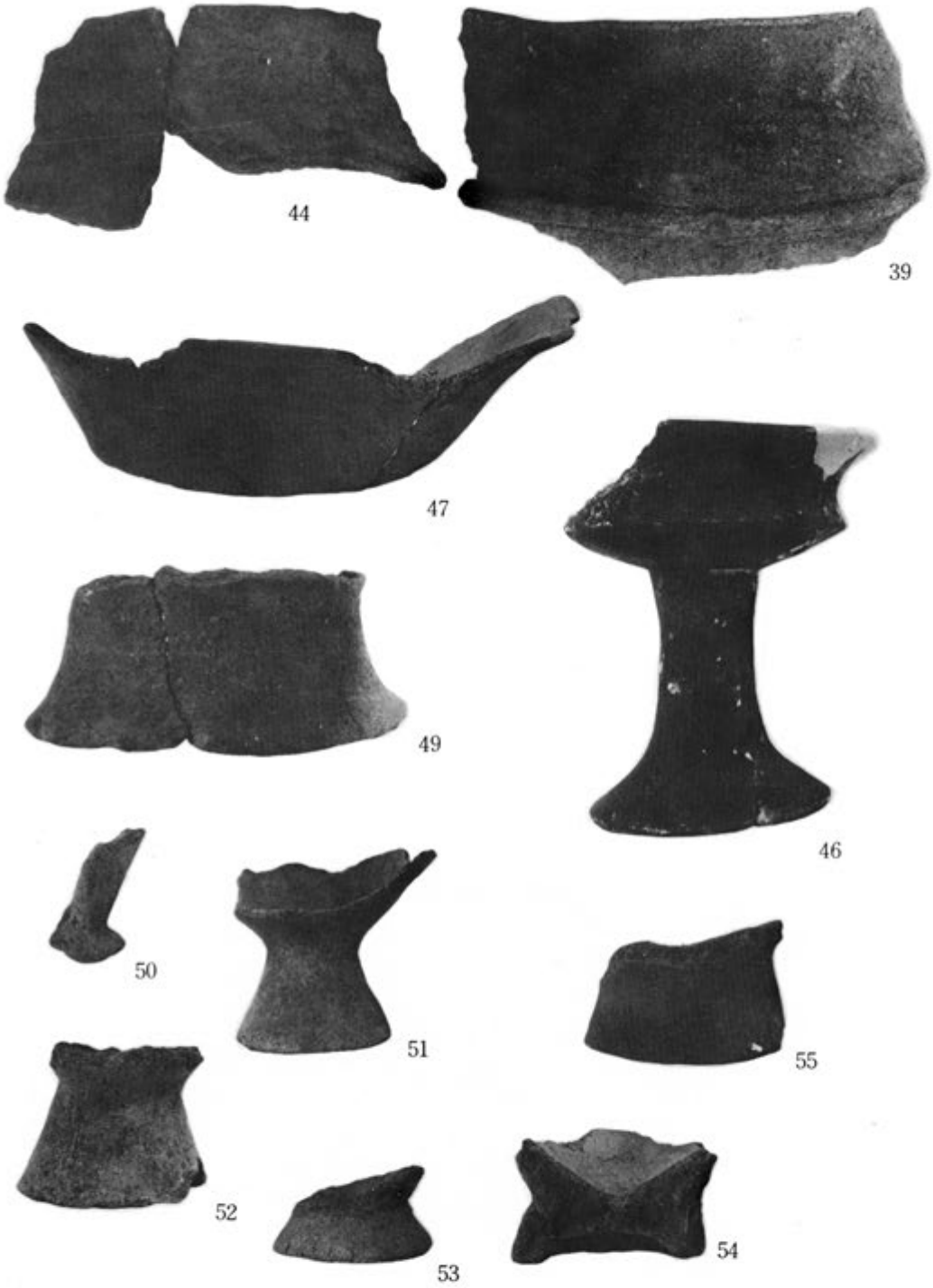
図版12　特別地点出土土器



42

43

図版13　特別地点出土土器



図版14　特別地点出土土器

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

新　番　所　後　遺　跡

県立指宿養護学校新設に伴う発掘調査報告書

発行日　昭和５２年２月２８日

発行　鹿児島県教育委員会　〒892　鹿児島市山下町14番50号

印刷　（有）昌和堂印刷　〒890 鹿児島市宇宿二丁目16－11